

韓国北漢山国立公園の周回歩道 「北漢山トウルレキル」に関する考察

油井 正昭

江戸川大学国立公園研究所客員教授
千葉大学名誉教授／桐蔭横浜大学客員教授

1. はじめに

韓国における最初の国立公園は、「公園法」（1967年3月3日制定、法律第1909号）に基づいて、1967年12月29日に朝鮮半島南部の、韓国で最も原生的自然が存在するとされる智異山(チリサン)山塊(主峰・天王峰、1,915m)が、「智異山国立公園」として指定された。智異山国立公園の公園面積は47,175haで、韓国の国立公園の中で最も面積が大きい国立公園である。

「公園法」は、都市公園と自然公園の両方を扱う法律であったため、1980年に「都市公園法」と「自然公園法」に分けられることになり、自然公園法は1980年1月4日、法律第3243号として制定され、以後の国立公園は自然公園法に基づいて指定され、管理運営されている¹⁾。

2022年現在の国立公園は、山岳地域の国立公園(山岳型)18カ所、海岸・海洋地域の国立公園(海岸・海洋型)3カ所、史跡中心の国立公園(史跡型)1カ所の合計22国立公園が存在する。最も新しい国立公園は、朝鮮半島の脊梁山脈である白頭大幹が、智異山の方角(南西方向)へ向かい、そこから洛東山脈が分岐する太白山(テペクサン、1,567m)一帯に、2016年に指定された太白山国立公園である。太白山国立公園の公園面積は約7,000haで、1万ha以下の国立公園は韓国国立公園の中で小規模の方である。

韓国の山岳型国立公園は、半島の脊梁山脈あるいはその支脈の優れた自然地域に指定されており、海岸・海洋型国立公園は半島南部の多島海地域と半島西海岸にある。唯一の史跡型国立公園は、新羅時代の遺跡と仏教文化財が存在する慶州国立公園である。

これら22カ所の国立公園の総面積は、陸域が約41万ha、海域が約27万haで、陸域は韓国国土の約4.1%である。韓国の国立公園は、土地所有を指定要件としない、区域を定めて指定する地域制であり、土地所有

状況は国有地約49%、公有地約11%、私有地約30%、寺院所有地約9%となっている²⁾。土地所有状況では、寺院所有地が1割近くを占めていることが大きな特徴になっている。これは、古来2000年の歴史をもつ韓国では、山岳地帯のいたる所に寺院があり、この寺院の存在により自然が維持されてきた背景がある。国立公園の指定がこれらの寺院を包含して行われており、国立公園内に寺院所有地が多い理由になっている。

韓国の国立公園は、現在入園無料だが、1970年5月に俗離山(ソンニサン)国立公園で最初の入園料徴収制度が始まり、1974年に智異山(チリサン)国立公園にも導入され、その後1987年7月に北漢山(プカンサン)国立公園での導入を最後に、全ての国立公園で入園料を徴収する制度になった。しかし、2005年9月の国会で入園料徴収制度廃止が議論され、2006年9月1日に廃止が決定したため、2007年1月1日から全ての国立公園が入園無料になった。そのため、各国立公園で利用者が増加し、過剰利用、利用者集中の問題が生じることになった³⁾。

特に、首都ソウル特別市の近郊にある北漢山国立公園などは、公園周辺まで都市化が進んでいて、公園の近くで大規模なニュータウン開発が行われた影響もあり、公園利用者の増加が著しく、過剰利用と利用者集中に伴う自然荒廃が顕在化して問題になった。

北漢山国立公園は登山利用が盛んな上に、市民の健康志向の高まりで来訪者が増え、自然荒廃の対策に迫られることになった。この状況をふまえ、国(国立公園所管庁の環境部)と国から国立公園管理の委任を受けている国立公園公団(旧：国立公園管理公団)^[補註1]では、さまざまな対策を実施している。例えば、自然公園法に基づく自然休息年制の適用や自然保護区を設定しての利用者の立入規制、山頂を目指す登山ではなく、山麓部での自然探勝促進による利用者分散、また、これまで国立公園利用の機会が少なかった子ども、高齢者が容易に公園利用できるようにする施設整備、北漢山城地区の主要登山道沿いの飲食店や露店の

撤去・移住による環境整備事業などが挙げられる。

こうした対策の中で、山頂への登山ではなく、山麓での自然探勝の促進による利用分散、健康志向の高まりに対するトレッキング道づくり、子どもや高齢者など利用者層の拡大などに対応する、国立公園の低山部を周回する探勝歩道として「北漢山トゥルレキル」を2010年から2011年にかけて整備した。韓国語で「トゥルレ」は「周辺、周り、縁」、「キル」は「道」のことで、「トゥルレキル」は国立公園の周囲を回遊する歩道を意味する。

韓国では2000年代に近いころから、国民の健康志向の向上や観光振興などと関連して、各地で地域の自然や文化遺産を巡る小道づくりが盛んになってきていた。その中で、山林庁と地域との協力で、智異山国立公園の周辺を回遊する全長約300kmの「智異山山林文化体験森の道」(以下：智異山森の道)が、2007年から5年をかけて2011年に整備され、また、リゾート観光地で著名な済州島(チェジュド)では、2007年から2012年にかけて、地元で設立された法人とボランティアの協働で、約350kmの済州島を一周する探勝歩道「済州オルレ」が造られ、観光振興に大きく貢献した。「オルレ」は済州島で「表通りから家の門に通じる狭い路地」を指す言葉であり、誰もが親しみを感じる小道を意味する。

このように、各地の小道づくりの中には、かなりの長距離の探勝歩道があり、国立公園を所管する環境部による「北漢山トゥルレキル」整備は、これらの長距離の探勝歩道が、多様な目的の歩道づくりであることから、その動向が影響していると云える。

本論は、韓国国立公園の新しいタイプの公園施設である「北漢山トゥルレキル」を取り上げ、施設の特徴と施設整備の効果について考察することにする。

2. 北漢山国立公園の特徴

北漢山国立公園は、1983年4月2日に15番目の国立公園として、ソウル特別市、京畿道(キョンギド)の高陽市(コヤンシ)、楊州市(ヤンジュシ)、議政府市(ウイジョンブシ)にまたがる山岳地域に指定された。北漢山国立公園の位置を図-1に示した、公園は南北約15km、東西約5~7kmの南北に細長い形状の山塊で、面積は7,992haである。

北漢山(プカンサン)の名称は、ソウル中心を流れる大河の漢江(ハンガン)の北にある大きな山という意味で、朝鮮時代の1700年代初期、山中に北漢山城が造られてから使い始められたのが由来とされる⁴⁾。

国立公園区域を形成する山岳地域は、標高が100~

850mにわたる花崗岩地帯で、主稜線を形成する山々は北から南へ連なっている。公園の地形を見ると、公園の中央部よりやや北部寄り、ソウル特別市の牛耳洞(ウイドン)地区-ソウル特別市と京畿道の境界である牛耳峠(ウイコゲ、約330m)-牛耳峠の北側にある牛耳嶺(ウイリョン、約450m)から北西に流れる深い渓谷を結ぶラインで大きく南北に分かれていて、北側は道峰山(ドボンサン)地域、南側は北漢山(プカンサン)地域と呼称されている。

北漢山国立公園の景観特性は、花崗岩の巨大な岩峰が連なる山岳と、花崗岩地形を侵食して流れる清流の渓谷である。

道峰山地域は、地域の中央部に紫雲峰(チャウンボン、740m)、仙人峰(ソニンボン、708m)、万丈峰(マンジャンボン)、神仙台(シンソンデ)などの岩峰が一群をなし(全体が道峰山)、その支脈にも五峰山(オーボンサン、660m)があつて、見事な花崗岩が露出した岩山の景観をなしている。

また、北漢山地域の岩峰は、最高峰の白雲台(ペグンデ、837m)の周囲に仁寿峰(インスボン、811m)、万景台(マンギョнде、800m)、露積峰(ノジョクボン、716m)、霊峰(ヨンボン、604m)が岩山の一団をなし(全体が北漢山)、派生する支脈も標高を下げた岩山が連続しており、北漢山は岩峰がそそり立つ巖々とした景観を見せている。道峰山地域と北漢山地域の山



図-1 北漢山国立公園の位置図

を比較すると、北漢山地域の岩峰群の方が、道峰山地域の岩峰群より標高が高い。

そして、北漢山国立公園内の溪谷には、北漢山城(プカンサンソン)溪谷、松湫(ソンチュ)溪谷、無愁谷(ムスコル)溪谷、牛耳(ウイ)溪谷、貞陵(チョンヌン)溪谷、平昌(ピョンチャン)溪谷、旧基(グギ)溪谷、九川(クチョン)溪谷など清流が流れる多くの溪谷があり、公園全体が岩峰と溪谷との一体をなした景観で構成されているのが最大の特徴と云える(写真-1)。

なお、山中に相当な距離にわたって残存する北漢山城の石垣(城壁)と、長い歴史をもつ100カ所を超える寺院・庵が山岳と一体になっており、歴史を刻んだこれらの文化遺産の景観も北漢山国立公園の特性の一つに挙げることができる⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾。

北漢山国立公園は、ソウル中心市街から北の方角に遠望でき、公園まで地下鉄やバスで30分~1時間で到達できる至便な国立公園である。国立公園の区域に接する位置まで都市が発達していることもあり、年間利用者は500~600万人である⁸⁾。1994年には公園単位面積当たりの利用者数が、最も多い国立公園としてギネスブックに登録され、その証書が国立公園東側に位置する水躰(スユ)地区のトゥルレキル探訪案内センター(ビジターセンター)に展示されている。

国立公園内の展望施設から周囲を見渡すと、国立公園は市街地に囲まれていて、高層建築が建ち並ぶ住宅団地が迫っているのに驚くとともに、北漢山国立公園が都市内に残されている緑の島の存在であることを理解させられる。その意味では、8,000haに近い広大な北漢山国立公園の緑地は、ソウルの自然環境保全、大気汚染が問題になっているソウルの大気浄化に大きく貢献していることが感じ取れる。

国立公園利用では登山が盛んで、道峰山地域も、北

漢山地域も登山道が発達している。首都ソウル特別市の一角をしめている国立公園は、ソウル市民の日常的な野外レクリエーション地や行楽地であるだけではなく、全国各地から利用者が訪れている。そのため、過剰利用や利用者集中の問題を抱え、その影響で地形が急峻な登山道では自然荒廃が発生し、自然復元を期すために、自然公園法に基づく自然休息年制の指定による利用禁止の登山道が多く存在する⁴⁾⁵⁾。

自然休息年制は、自然公園法第28条第1項の『公園管理庁は自然公園の保護、破壊された自然の回復、利用者の安全、その他公益上必要と認める場合は、公園の一部地域を指定し、一定期間その地域に人の出入りまたは車の通行を制限、禁止することができる』と規定している条項に基づいて、1991年から実施している制度である¹⁾。

現在は登山道の荒廃をくい止め、自然復元を図る自然休息年制指定に加えて、溪谷の汚染防止と生態系保護のために、表-1に示す8カ所の特別保護区が設定されている⁹⁾。

特別保護区の設定も自然公園法第28条を根拠にして、2007年から導入された制度で、特別保護区内は立ち入り禁止のため、現地に公園利用者へ周知を図る標識が掲出されている(写真-2)。

表-1を見ると、特別保護区の規模は狭くないが施行期間は比較的長く、設定から約20年間、2026年までが6カ所、2027年までが1カ所、2028年までが1カ所となっている。現在の特別保護区は8カ所すべてが溪谷だが、特別保護区には、①野生動物の生息地、②野生植物の生育地、③湿地・溪谷、④自然休息年制(遊歩道等)の4種類があり、2007年の設定当初は表-1の8カ所以外に、自然休息年制に指定されていた自然毀損地と荒廃登山道の復元を目的に3カ所の特別保



写真-1 北漢山城地区からの北漢山の景観(筆者撮影)

護区が設定されていた。この3カ所は施行期間が2011年までとなっていたので、現在は溪谷の特別保護区だけが期間内になっている。

特別保護区は、立ち入り禁止のため、違反が摘発されると自然公園法第28条(立入禁止)違反として、50万ウォンの過料の厳しい罰則規定がある。

この他にも公園管理の環境回復対策として、公園西側の行楽地として利用者で賑わい、公園利用の中心地となっている北漢山城地区で、主要な登山道沿いにあった多数の飲食店や露店を撤去・移住させ、跡地の自然復元を図る大がかりな環境整備事業を実施している。飲食店、露店の中には、河川の中の岩に傷をつけて施設を設置し、また、許可を受けていないものもあ

り、登山道沿いの自然環境を毀損している状態にあった。国(環境部)と国立公園公団では、この毀損されている環境の復元整備計画を2001年から取り組み始め、2006年から計画を実行して飲食店、露店の撤去に5年かかり、国を相手に10件を超える訴訟に発展した物件も出たが、訴訟はほとんどが2015年までに解決した¹⁰⁾。

北漢山国立公園管理事務所では、他にも自然再生・環境保全事業として、登山者の踏み付けで広がってしまった登山道や、林内へ行楽客が入り込んで裸地化した荒廃地に柵を設置し、植樹を行って森林の再生や回復を図る事業も行っている¹¹⁾。

北漢山国立公園では、長年の間に山域の自然破壊が

表-1 北漢山国立公園の特別保護区

	対象地	タイプ	規模 (ha)	施行目的	施行期間
1	貞陵溪谷 (貞陵旧切符売場～清水滝上流30m)	溪谷	1.75	溪谷汚染防止 及び生態系保護	2026年
2	インスチョン川 (ハニルギョ橋～警察隊境界)	溪谷	1.50	溪谷汚染防止 及び生態系保護	2026年
3	牛耳溪谷 (公園事務所牛耳分所200m下 ～旧白雲切符売場)	溪谷	0.80	溪谷汚染防止 及び生態系保護	2026年
4	旧基溪谷 (公園事務所旧基分所～第4休憩所)	溪谷	1.00	溪谷汚染防止 及び生態系保護	2026年
5	平昌溪谷 (平昌2旧切符売場～東嶺滝の上)	溪谷	0.40	溪谷汚染防止 及び生態系保護	2026年
6	沙器膜ゴル溪谷 (溪谷入口～軍部隊入口橋梁)	溪谷	2.88	溪谷汚染防止 及び生態系保護	2027年
7	松湫溪谷 (松湫1鉄橋～五峰三叉路)	溪谷	3.42	溪谷汚染防止 及び生態系保護	2026年
8	統一橋～金剛庵の右側溪谷	溪谷	2.00	溪谷汚染防止 及び生態系保護	2028年

注：韓国国立公園公団HPの韓国国立公園の紹介・特別保護区の案内を基に作成



写真-2 特別保護区の標識(筆者撮影)

進んだ状態に対し、さまざまな施策を用いて、国(環境部)と国立公園公団が協働して自然復元、回復に向けて注力していると云える。

このような状況を背景に、国立公園所管庁の環境部は、登山利用者の分散やトレッキングへの対応、国立公園利用が少なかった子どもや高齢者が容易に利用できる、多目的利用の探勝歩道として、国立公園の低山部を周回する探勝歩道整備を進め、2011年6月に全長71.5kmを開設させた。この探勝歩道が「北漢山トゥルレキル」である¹²⁾¹³⁾。「北漢山トゥルレキル」には、初心者が容易に歩けるように整備された区間がかなりあり、子ども、高齢者、家族づれ利用が盛んに行われるようになった。

北漢山には高句麗、百濟、新羅の三国時代から度々城が造られた歴史があるが、朝鮮時代に造られた北漢山城の石垣(城壁)は現在も長い距離にわたって山内に残っていて、容易に見ることができる。また、山麓には王族の墓地(古墳)が造られた場所があり、随所に由緒ある寺院もあるので、遺跡や寺院など歴史と文化をたどる公園利用も盛んに行われている。

「北漢山トゥルレキル」が開設されてから2年後の2013年11月に、ソウル市立大学の国立公園を研究している李景宰教授(環境生態学)や環境生態研究所の方々と、公園西側の利用中心地である北漢山城(プカンサンソン)地区と東側の道峰洞(ドボンドン)地区を訪れ、利用状況や公園施設を見学した。北漢山城地区にも、道峰洞地区にも多くのスポーツ用品店があり、店先にトレッキング用品が並んでいて、トレッキング利用が盛んなことを感じ取ることができた。北漢山城地区には、日本のスポーツ用品会社も出店していた。「北漢山トゥルレキル」の開設は、地域活性化に貢献しているように思われた(写真-3)。

3. 国立公園の低山部を周回する「北漢山トゥルレキル」

「北漢山トゥルレキル」の整備は、『歴史と文化、自然と人間が息づく自然で安らげる道』を方針にして⁸⁾¹³⁾、具体的には既存する森の中の道、里の道、集落内の道などをつないでルートをつくり、初心者も容易に利用できるように、地形的に高低差が少ない道を考慮してコースを設定している。

「北漢山トゥルレキル」は、2010年9月7日に公園南部の北漢山地域の45.7kmが開設され、2011年6月30日に公園北部の道峰山地域の25.8kmの開設により、全路線71.5kmが完成した¹²⁾。

「北漢山トゥルレキル」は図-2に示すとおり、路線が21の区間に分けてある。各区間は、歩道の起伏状態や距離などを基に、利用の難易度を初級、中級、上級の3段階に分けていて、初級向きの区間は起伏が少なく、容易に利用できるコースである。各区間の起点は集落や一般道からアクセスでき、集落から離れている場合は取付け歩道が設けられている。

21の区間の状況は表-2のとおりで、各区間にはコースごとの特徴を示す区間名(愛称名)が付けられている。一つの区間の距離は2~5km程度で、所要時間が1時間から2時間30分である。利用難易度を見ると、初級向きが約半数の10区間、中級向きが8区間、上級向きは3区間となっていて、初級向きの10区間の距離は28.6kmで、全路線の40%になっている。初級向きの区間には、距離が2km以下の短い区間が2カ所あり、「9区間・近くで楽しむ道」1.5kmと「20区間・王室墓域の道」1.6kmは、起伏がほとんどなく、この二つの区間は所要時間が約45分で、子ども、高齢者、家族づれが、樹林や小さな集落の中をゆっくりと歩くことができる区間となっている。利用難易度が中級、



写真-3 北漢山城地区のスポーツ用品店(筆者撮影)

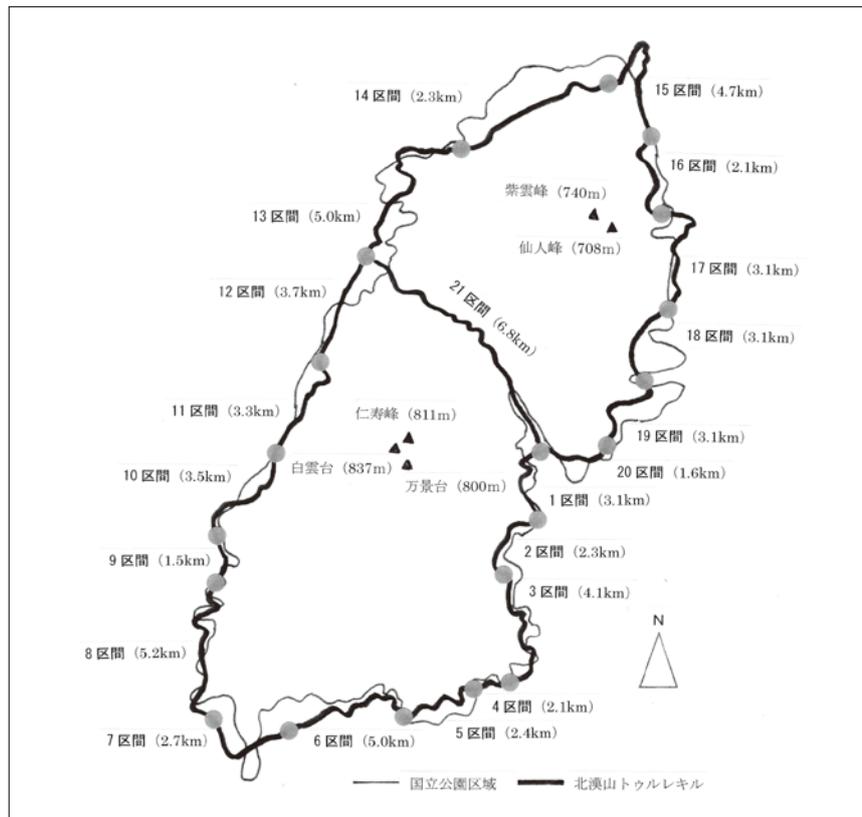


図-2 「北漢山トウルレキル」のルートと区間の設定状況

表-2 「北漢山トウルレキル」の区間の状況

地域名	区間	歩道の愛称名	距離	所要時間	難易度	完成年月
北漢山 地域 12区間 45.7km	1	松林の道	3.1km	約1時間30分	初級	2010年9月
	2	巡礼の道	2.3km	約1時間10分	初級	〃
	3	白雲の道	4.1km	約2時間	中級	〃
	4	松泉の道	2.1km	約1時間	初級	〃
	5	瞑想の道	2.4km	約1時間10分	上級	〃
	6	平倉村の道	5.0km	約2時間30分	中級	〃
	7	古城の道	2.7km	約1時間40分	中級	〃
	8	雲の庭園の道	5.2km	約2時間30分	中級	〃
	9	近くで楽しむ道	1.5km	約45分	初級	〃
	10	内侍墓域の道	3.5km	約1時間45分	初級	〃
	11	孝子の道	3.3km	約1時間30分	初級	〃
	12	忠義の道	3.7km	約1時間45分	中級	〃
道峰山 地域 8区間 25.8km	13	松湫村の道	5.0km	約2時間30分	初級	2011年6月
	14	山越えの道	2.3km	約1時間10分	上級	〃
	15	アングルの道	4.7km	約2時間20分	中級	〃
	16	堡塁の道	2.9km	約1時間30分	上級	〃
	17	タラグォンの道	3.1km	約1時間30分	初級	〃
	18	道峰旧道	3.1km	約1時間30分	初級	〃
	19	放鶴洞の道	3.1km	約1時間30分	中級	〃
	20	王室墓域の道	1.6km	約45分	初級	〃
東西横断	21	牛耳嶺の道	6.8km	約3時間30分	中級	〃
計			71.5km			

注：韓国国立公園管理公団の「北漢山トウルレキル」パンフレット(韓国語版)を基に作成

上級の区間には、高低差が大きい区間、アップダウンを繰り返す区間もあるが、区間距離と所要時間とを勘案すると、山頂を目指す急峻な登山道とは比べ物にならない緩い勾配と起伏状態なので、健康志向のトレkkerが楽しめるトレッキング・コースのように思われる。

「北漢山トウルレキル」は、既存の道をつないでコースが造られているので、歩道の幅員は集落内では広い所もあるが、森林内は1～2mである。路面は基本的には未舗装である。

利用者の支援施設には、9カ所のトウルレキル探訪案内センターが整備されていて、国から公園管理を委任されている国立公園公団の職員が探訪案内を行っている。その中の1カ所、公園東側の「2区間・巡礼の道」が通る水躰(スユ)地区の探訪案内センターは展示室があり、トウルレキル沿線の自然、歴史、文化遺産、国立公園の概要などの展示解説が行われている(写真-4)。展示室の見学を2013年11月に行ったが、展示手法、展示内容が優れており、北漢山国立公園の

ビジターセンターの役割も果たしていると思った。

また、沿道の付帯施設としては、トイレ、展望施設が整備されている。「北漢山トウルレキル」のパンフレット¹²⁾を見ると、トイレの位置は20カ所あり、国立公園の利用中心地の北漢山城地区や貞陵地区に近い区間などは、利用者が多いことを配慮して、かなり短い距離でトイレが整備されている様子が読める。

「21区間・牛耳嶺の道」は、公園中央部やや北寄りの位置を東西に公園を横断するコースで、距離が6.8kmと最も長い区間である。コースの途中にソウル特別市と京畿道の行政界になっている牛耳岬(標高約330m)があり、岬越えをするために起点から約200mを登る歩道になっている。「牛耳嶺の道」の利用難易度は中級、距離が長いため途中で2カ所のトイレ、道峰山地域の五峰山と深い溪谷の風景を觀賞して、休憩できる展望テラスが整備されている(写真-5)。「牛耳嶺の道」が整備されている一帯は、軍事的理由で長い間立ち入りが規制されていた地域のため、沿道は自然がよく残っている。そのため、「牛耳嶺の道」は、



写真-4 水躰のトウルレキル探訪案内センターの展示室(筆者撮影)



写真-5 「21区間・牛耳嶺の道」の展望テラス(筆者撮影)

深い溪谷を囲む自然林や、道峰山と北漢山の両方の岩峰を眺望できる優れた探勝歩道である。

この「牛耳嶺の道」は、利用者が1日1,000人に限定されていて、利用は予約制になっている。東側、西側の歩道入口から1日500人ずつの利用で、予約は国立公園公園の牛耳探訪案内センターへインターネットで行う。外国人は電話予約(英語対応)もできることになっている。申込者が定員に達しなかった場合は、残りの人数を当日現地で先着順に定員数まで受け付ける決まりである。

2013年11月に国立公園西側北漢山城地区の「10区間・内侍墓域の道」の一部と、東側の「19区間・放鶴洞の道」の一部、「21区間・牛耳嶺の道」を利用した。各区間でカラフルなトレッキング・ウエアを着た多くの利用者と出会った(写真-6)。「牛耳嶺の道」では、一人でゆっくりと歩いている人や速足の人、若者のグループ利用の姿を多く見る事ができた。

「19区間・放鶴洞の道」は、トゥルレキルのコースが公園境界から200～300m公園内を通っている関係で、公園区域外の無愁谷(ムスコル)溪谷入口にある集落からコースまで取付け歩道が付けられていた。その取付け歩道の入口が写真-7である。入口からコースまで取付け歩道を使い、コースに出て登りの道を行くと、小高い丘の上に双子展望台が整備されていた。展望台の高さは地上から7～8mだろうか、森林を形成している高木の樹冠の上までらせん状の階段を登ると、正面に道峰山地域の岩峰群の景観を望むことができた(写真-8)。「放鶴洞の道」では、かなりの速足で歩いている利用者(トレッカー)に出会ったが、利用者それぞれが体力と健康増進を考えて歩いているように思えた。



写真-6 カラフルなウエアを着たトレッカーのグループ(筆者撮影)



写真-7 「19区間・放鶴洞の道」の入口(筆者撮影)



写真-8 「19区間・放鶴洞の道」双子展望台から見た道峰山地域の景観(筆者撮影)

4. 考 察

4-1 「北漢山トゥルレキル」の探勝歩道としての特徴と多様な効果

1) 「北漢山トゥルレキル」整備の背景とコース設定

「北漢山トゥルレキル」整備の背景は、きわめて多様な要因がある。その要因をあげると、①北漢山国立公園は登山利用が盛んで、過剰利用や利用者集中により自然荒廃が著しく、その対策に自然休息年制を導入して登山道利用を規制していること、②特別保護区を設定して立入禁止の場所を設け、自然復元、溪谷の汚染防止、生態系の保護などの必要に迫られていること、③山頂を目指す登山だけでなく、低山地域でトレッキング利用を促進し、利用の分散を図ること、④従来は利用が少ない子どもや高齢者、家族づれの利用機会を増進する自然探勝の施設整備を行いたいこと、⑤北漢山国立公園は市街地に囲まれ、近くで大規模住宅団地が開発されて近隣から利用者増が発生していること、⑥ソウル中心市街から交通至便の国立公園であり、市民の日常的な野外レクリエーション地として人気が高く利用が盛んなこと、⑦国民の健康志向が高まり、トレッキングが盛んになっていること、⑧智異山周辺での山林庁と地域とが協力した長距離の「智異山森の道」(智異山トゥルレキル)整備や、済州島で済州島一周の探勝歩道「済州オルレ」が造られるなど、全国的にトゥルレキルが注目されていること、などさまざまな要因がある。

このような多様な要因の下で、国立公園を所管する環境部は、北漢山国立公園に新たな利用形態を普及させる必要性から、国立公園の外周に近い低山地域に、初心者も容易に利用可能な周回探勝歩道として、トゥルレキル整備を行ったと云える。

「北漢山トゥルレキル」の整備に当たって、周回コースの設定には、既存の森林内の道、里の道、集落内の道をつないでルートを作り、地域が刻んできた歴史や文化遺産、自然と人間が作り出した景観を楽しみながら、誰もが容易に、安心して気軽に利用できる小道として実現させている。

2) 「北漢山トゥルレキル」の特徴と整備効果

「北漢山トゥルレキル」は全長71.5kmを21の区間に分けている。一つの区間は2~5km、所要時間は1時間から2時間30分の設定である。各区間は利用難易度を初級、中級、上級の3段階に分けている。21区間のうちの10区間、距離28.5km(全コースの40%)は初

級向きである。初級向きのコースは、起伏が少ないため歩きやすく、所要時間も短いから子ども、高齢者、家族づれ、トレッキング初心者に公園利用を親しむ機会を与えている。

また、初級向き区間が連続するカ所もあるので、1区間だけでなく、初級者も長い距離を歩くことができるようにもコースが造られている。また、各区間には特徴を表す区間名(愛称名)が付けられていて、その区間をつなげて歩くことも紹介されている¹⁴⁾。

中級向きコースは8区間で距離は35.3km、上級向きコースは3区間で距離は7.6km、中級と上級コースには高低差が大きい区間、アップダウンを繰り返す区間、距離の長い区間などがあるが、急峻な北漢山山頂への登山道に比較したら、容易に歩けるコースであり、楽しくトレッキングができるコース設定になっているように思われる。

事実、「21区間・牛耳嶺の道」は、距離が6.8kmと21の区間の中で最も長距離のコースで、コースの途中で牛耳峠(標高約330m)を越えるため、高低差約200mを登り、下りするが、一人で歩く人、若者グループなど大勢のトレkkerが楽しそうに歩いている状況を現地で見ている。

各区間の起点は、集落や一般道からアクセスしていて、どの区間からでも歩くことができる。コースが公園区域の奥まった位置を通る区間に対しては、集落などからコースまでのアプローチの歩道が付けられてもいる。

「北漢山トゥルレキル」には、国立公園の入口部や利用の中心地になっている貞陵(チョンヌン)、旧基(クギ)、北漢山城(プカンサンソン)、牛耳(ウイ)、水踰(スユ)、道峰洞(ドボンドン)など9カ所にトゥルレキル探訪案内センターが整備されている。その一つ、公園東側の水踰探訪案内センターには、写真-4に示したような展示室があり、トゥルレキル沿線の自然や人文、国立公園の概要などの展示解説が行われている。窓口ではパンフレットの配布、トゥルレキルの記念バッジの販売なども行っており、楽しめる施設として、国立公園のビジターセンターの役割も果たしている。

トゥルレキル探訪案内センターの他に、付帯施設としてコースの途中に20カ所のトイレや展望台、展望テラスなどの展望施設があるが、パンフレットを見るとトイレは国立公園の利用中心地に近い区間は利用者が多いため、整備カ所が多いようである。

また、展望施設には、写真-5に見られるような解説板なども整備されていて、解説を読んで一休みする、休憩地の機能を果たす施設になっており、山頂まで行かなくても国立公園の雄大な景観を眺め、解説板

からさまざまなことを学ぶことができることなども、トゥルレキルが果たしている効果であろう。

なお、「21区間・牛耳嶺の道」は、国立公園を東西に横断するコースだが、「北漢山トゥルレキル」の中でこの区間だけが利用者数の制限を設けている。利用者を1日1,000人に制限していて、利用は予約制となっている。東側、西側の歩道入口から1日500人ずつの利用である。予約はインターネットで牛耳探訪案内センターに行き、申込者が定員に達していない日は、当日現地で先着順に定員数まで受け付けている。外国人は英語対応だが電話でも予約を受け付けることになっている。「北漢山トゥルレキル」の利用に当たり、外国人への配慮として、申し込みをインターネットに限定せず、電話対応も取り入れていることは、評価されてよいと思う。この「21区間・牛耳嶺の道」の一角は、近年まで軍事的理由で立ち入りが規制されていたため自然がよく残っており、一日の利用者数を制限して過剰利用を避け、自然荒廃を防ぐ公園管理の方針も優れていると思う。

「北漢山トゥルレキル」の整備は、山頂を目指す登山者の分散や、過剰利用による登山道周辺への人為圧の抑制、また、公園利用者層の拡大や地域活性化など、さまざまな効果を上げ、特に、登山者の利用分散は、北漢山国立公園で最も危惧されてきた、登山道と登山道沿いの自然荒廃の軽減に効果をもたらしていると思うのである。

なお、国立公園公団が公表している、北漢山国立公園の「北漢山トゥルレキル」の説明の中に、『最近の自然探訪の傾向が、智異山森の道、済州島オルレキルなどのように多様化されていることから、国立公園にもこのような探訪需要の増加と形態に合わせた多様な国立公園を探訪するインフラを構築する必要を多くの人から意見が届いている』という記述があり、こうした社会の動きをふまえて、環境部が「北漢山トゥルレキル」を計画し、整備したことが述べられている¹³⁾。「智異山森の道」(智異山トゥルレキル)や「済州オルレ」は、古い小道をつないで長距離探勝歩道を造り、地域への来訪者が容易に、安心して自然、文化遺産などを探訪し、区間を区切っているのでどこからでも歩くことができ、地域の人ともふれあえる新しいタイプの探勝歩道として注目されており、このような形態の探勝歩道が「北漢山トゥルレキル」の開設に影響を与えていると云えるので、次に「智異山森の道」(智異山トゥルレキル)と「済州オルレ」の特徴などを考察する。

4-2 「智異山森の道」(智異山トゥルレキル)、「済州オルレ」の特徴と地域の協力、協働

1) 「智異山森の道」(智異山トゥルレキル)の特徴と整備への地域協力

「智異山森の道」は、韓国で最初の国立公園である智異山国立公園の周辺を回遊する探勝歩道である。智異山国立公園は、公園面積が国立公園最大の47,176haあり、公園の外周は300km以上ある。

この智異山国立公園の外側を周回する探勝歩道を、山林庁と市・郡・町村、社団法人森の道が協力して2007年から整備に取り組み、「智異山森の道」(智異山トゥルレキル)として2008年5月に一部が開設し、2011年に約300kmの全ルートが完成した。「智異山森の道」(智異山トゥルレキル)整備事業は、国立公園所管の環境部ではなく山林庁である。

智異山国立公園は、韓国で最も原生自然が残っている山域で、韓国を代表するいわば韓国のシンボリックな国立公園であり、地元にとっては最大の観光資源である。

国立公園の利用形態では、登山とキャンプが盛んである。そのため、登山道と登山道周囲やキャンプ地の自然荒廃が問題になっている国立公園の一つで、公園管理では自然休息年制、特別保護区が広い区域に導入されている。特別保護区は高山植物群落保護、重要野生動物生息地保護、高山湿地生態系保護、渓谷汚染防止を目的にして、面積を大きくとっている保護区があるので、公園利用に大きな規制がかかっている状況にある⁹⁾。自然休息年制の登山道や特別保護区指定地は、立ち入りが禁止されており利用できない。

智異山国立公園の中で、智異山十景の一つに数えられ、利用者が多く自然荒廃地になっている、公園南部の老姑檀(ノゴダン、1,507m)地区を、湖南大学の呉求均教授(緑地生態学)と2度訪れたことがあり、現地の自然荒廃の状態を見ているが、山頂部一帯は利用者が立ち入らないように金網柵を設置し、呉求均教授と国立公園公団によって植生復元の研究と現地に苗圃を設けて植樹実験が行われていた。しかし、荒廃した土地の植生復元は困難を極めていた。老姑檀地区には、国立公園公団が経営するロッジ(山荘)、キャンプ場などがあり、登山者に人気のある利用地域になっている。

こうした国立公園の実状が、少なからず背景になっているものと思うが、地域には2007年に社団法人森の道が設立され、智異山の生態系保護運動や智異山の麓の村々をつなぐ道の保存活動を行っていた¹⁵⁾。智異山の自然を保全する上で、公園利用者の分散や地域振興の効果を期待し、山頂を目指す登山、稜線を縦走す

る登山ではない山麓の森林、川辺、農地、集落の古い道をトレッキングして、地域の自然と文化を楽しむ、智異山国立公園周辺を回遊するトゥルレキルが、山林庁と地域の協力で長距離探勝歩道として造られた。

「智異山森の道」(智異山トゥルレキル)は、全羅北道(チョンラブクド)、全羅南道(チョンラナムド)、慶尚南道(キョンサンナムド)の3道にまたがり、5市郡、16町村の80を超える集落をつないでいる。起点は全羅北道の南原市(ナムウォンシ)朱川(ジュチョン)で、時計まわりに22の区間が設定されている。各区間の距離は、10～20kmあり、距離が長いので所要時間が5～8時間となっている。区間の中には、地形、距離、所要時間などから見て、本格的に山岳地帯をトレッキングするハードな区間も含まれている。

「智異山森の道」(智異山トゥルレキル)のルートは、大半が智異山国立公園から少し離れた位置を回遊しているが、国立公園北部側で1区間、南部側で1区間の2つの区間で、僅かな距離が国立公園区域内に入っている。公園北側の区間は短い距離だが公園内を通り、南側の区間の方は、公園区域から離れている本線から枝線で公園入口の利用地(燕谷寺地区=ヨンゴクサチグ)へ到達するコースが造られている。

「智異山森の道」(智異山トゥルレキル)には、7カ所のトゥルレキル案内センターがあり、社団法人森の道が運営管理に当たっている¹⁶⁾。

探勝歩道づくりが、地方自治体の市郡、町村、地元で設立された社団法人森の道など、地域の協力の下で造られたことが大変重要なことだと思う。このことにより地域活性化に大きな影響を及ぼしている。

智異山国立公園外側を回遊するトレッキングは、智異山山塊の主稜線が40kmを超える大きな山岳風景を鑑賞することができ、智異山東側の鏡湖江(キョンホガン)や南西側の求禮川(クレチョン)の川辺がある区間、あるいは南側の河東湖(ハトンホ)を通る区間などでは水辺の開けた風景を眺め、行く先々の集落で地域の人々と交流もできる。各区間の距離が長いので、所要時間はかかるが、どの区間も1日で歩けるように設定されている。沿線7カ所にトゥルレキル案内所を設けており、安心してトレッキングを楽しむことができるように造られている。

このような「智異山森の道」(智異山トゥルレキル)の状況は、智異山国立公園の利用にも影響を及ぼし、公園全体の利用者数を抑制するとともに、利用者の集中を避ける効果ももたらしていると思うので、智異山国立公園の自然荒廃の基である人為的抑制に寄与していると考えてよいと思われる。

2) 「済州オルレ」の特徴と整備、管理運営の地元法人とボランティアの協働

もう一つの事例は、朝鮮半島の南海上にあるリゾート地として、国の内外から利用者が訪れている、済州島に造られた島を一周する探勝歩道である。この済州島を周回する探勝歩道は、2007年から2013年にかけて整備された¹⁷⁾。

済州島は中央部にある漢拏山(ハンラサン、1,950m)を中心に、漢拏山国立公園が指定されており、登山やハイキング利用が多い。公園面積は15,339haで、公園区域は漢拏山中腹より上部に限られていて、山麓の広い高原地帯や海岸部は公園区域に入っていない。

漢拏山は約2万5千年前にできた火山で、山頂に溶岩ドームがそびえ、山頂部には東西約600m、南北約400mの大きな火口があり、中に白鹿潭(ペンノクタム)という火口湖もある。漢拏山には、山麓一帯に大小多数の円錐形の寄生火山があり、高原に小高い寄生火山がある風景も独特で、観光に利用されている寄生火山もある。寄生火山は全体で368もあると解説されている⁴⁾。

山頂へ登る主要な登山道は5コースあるが、現在山頂付近は自然荒廃が激しく、自然休息年制の指定を受けている場所があるため、登山コースによっては山頂、火口湖まで行けない状況である^[補註2]。

1995年5月にソウル市立大学の李景宰教授(環境生態学)、湖南大学の呉求均教授(緑地生態学)、ソウル市立大学環境生態学研究室の趙 Woo さん(環境生態学)、千葉大学大学院博士課程の裴重南さん(環境計画学)らと済州島を訪れ、南西側から漢拏山へ登る霊室(ヨンシル)登山道を登った。登山口から山頂まで3.7kmのコースだったが、この登山道は、山頂付近が自然休息年制に指定されていたため、山頂を目の前にしたが、山頂までは行くことができなかった。

登山道が標高1,650m付近で森林帯を抜けると風景が一変し、植生の無い自然が荒廃した荒地が広がっていた。荒地の状況を見ると、登山道沿いの利用者が多いたための荒廃と、全体としては風衝地の様相を呈していた。この荒地の中の登山道沿いで、智異山国立公園の老姑檀(ノゴダン)地区と同様に、植生復元の実験研究が3年前から呉求均教授を中心に、李景宰教授も参加して行われていた。しかし、土壌が乏しく、表土が乾燥していて、荒地の植生復元成果はまだ出なかった。

霊室登山道の山頂近くは、登山道を含めて自然休息年制指定地のため、荒地の中に国立公園の管理職員が常駐する小規模な建物があり、利用者が自然休息年制指定地へ入って行かないように管理していた。この建

物は、避難施設(避難小屋)を兼ねているようだが、植生がない荒地に建つ鉄筋コンクリート造りに見える建物だったので、風景との調和がとれていないと感じたが、海上から2,000m近くを独立峰としてそびえている漢拏山は、厳しい気象現象にさらされていることを思わせた。

こうした漢拏山国立公園の状況下にあつて、国の内外から訪れるリゾート施設の滞在者、団体ツアーやグループで来訪する観光客の山麓や海岸部での探勝が普及してきて、地元設立された社団法人済州オルレ^[補注3]と、ボランティアの協働で海岸近くに探勝歩道づくりが始まり、2007年9月に島の東海岸に近い、西帰浦市(ソギボシ)始興(シフン)を起点に、最初の探勝コース15.6kmが開設された。この探勝歩道は「済州オルレ」と名付けられ、2012年11月までに済州島を一周する21の区間、距離約350kmが全通した。

「済州オルレ」は、山、森、里などの古い小道をつなぎ、自然探勝だけでなく、地域の文化や人ともふれあうように小さな集落をつないでコースを作っている。「済州オルレ」の管理運営は、社団法人済州オルレとボランティアによって行われている。

21の区間は、時計まわりに区間の番号が付けられていて、この21の区間の他に、本島から離れている島(牛島、加波島、楸子島)と一部区間での複線を含め、付属コースとして5つの区間が造られ、2013年12月までに合計26区間、約420kmが完成した。さらに、2022年6月4日に本島北側の18区間で新たな付属コースが開設され、総距離が437kmの長距離探勝歩道になっている¹⁸⁾。

「オルレ」は、済州島で「表通りから家の門に通じる狭い路地」をさす言葉であり、「済州オルレ」という名称は、道幅の狭い小道を意味する誰にでも親しみを感じさせるウォーキング道として、人気を集める基になっている。

済州島を一周する区間を歩けば、東シナ海(韓国では南海)や済州海峡の優れた海岸・海洋の風景と、島の中央にそびえる漢拏山の山岳風景を眺めることができ、沿道の集落では地元の人々と交流もできるので、「済州オルレ」は新たな観光施設としての地位を獲得していった。

「済州オルレ」の各区間の状況は表-3に示すとおりである。表-3を見ると、各区間距離は約15~20kmで設定されていて、1区間の距離が長いと所要時間は、短い距離の区間で4~5時間、長い距離の区間は7~8時間になっている¹⁷⁾。各区間の特徴を表すような区間名称(愛称名)は付けられていない。

2007年以前には存在しなかった、島の自然や小さ

な集落を探勝して島を一周する「済州オルレ」が造られたことにより、済州島の観光の多様化が図られることになった。最初は観光ツアーの団体が、海岸探勝に「済州オルレ」を利用して人気が出ていたが、次第に「済州オルレ」を歩く目的で観光客が島を訪れて利用するようになり、島の観光振興に大きく寄与するとともに、地域活性化に貢献している。「済州オルレ」が通る地域では、カフェや宿泊施設が増え、地域の人と観光客との交流も盛んになっている¹⁸⁾。

「済州オルレ」は、外来の資本ではなく、地元の社団法人済州オルレとボランティアの協働という地域の力で造られ、また大勢のボランティアが案内やガイドを務めて、地域の力で管理運営されているのでその意義は大きい。

「済州オルレ」が、国の内外から来訪してリゾート施設に滞在する人や、観光ツアーで訪れる多くの観光客に利用されていることは、漢拏山国立公園の利用にも影響を与え、公園利用者の分散とともに、少なからず国立公園の自然への人為圧軽減に貢献していると評価してよいだろう。

5. 結 論

韓国の首都ソウル特別市と京畿道にまたがる北漢山国立公園に、新たな探勝歩道として造られた「北漢山トゥルレキル」を取り上げ、トゥルレキルの特徴、公園の自然保全との関係、公園利用の増進、トゥルレキル整備による効果などを考察した。

また、「北漢山トゥルレキル」の整備に影響を与えた、「智異山森の道」(智異山トゥルレキル)と「済州オルレ」の特徴なども考察した。その結論は下記のとおりである。

(1) 北漢山国立公園は、首都ソウル市街の中心から30分から1時間で到達できる交通至便の国立公園である。既に市街地に囲まれた状態にあり、公園周辺で大規模なニュータウン開発もあつて近隣人口の増加で利用者が増え、また、2007年1月1日以後は入園料廃止など、さまざまな要因により公園利用者の増加、利用者の集中、登山道の荒廃など、国立公園として多くの問題を抱えることになった。年間利用者数は500~600万人を数え、1994年には単位面積当たりの利用者が最も多い国立公園として、ギネスブックに登録されたほどである。

北漢山国立公園の山塊は花崗岩地帯であり、国立公園の景観の特徴は、花崗岩の岩峰群と花崗岩地形を侵食する清流の溪谷とが形成する景観である。公園は地形的に見ると、公園の中央部よりやや北寄

表-3 「済州オルレ」の区間の状況

区 間	距 離	所要時間	難易度	備 考
1	15.6km	4～5時間	下	起点：始興(東海岸)
1-1	11.3km	4～5時間	下	本島の東にある牛島
2	16.2km	5～6時間	中	
3	20.7km	6～7時間	上	
4	22.9km	6～7時間	上	
5	14.7km	4～5時間	中	
6	14.0km	4～5時間	下	
7	13.8km	4～5時間	上	
7-1	15.1km	4～5時間	中	本線から枝線コース
8	19.2km	6～7時間	上	
9	7.1km	3～4時間	上	
10	14.8km	4～5時間	中	
10-1	5.0km	3時間	下	本島の南にある加波島
11	18.0km	5～6時間	上	
12	17.5km	5～6時間	中	
13	14.8km	4～5時間	中	
14	19.3km	6～7時間	中	
14-1	18.3km	7～8時間	上	12、13区間と複線の状態
15	19.3km	6～7時間	中	
16	19.3km	6～7時間	中	
17	18.4km	6～8時間	中	
18	18.8km	6～7時間	中	
18-1	18.2km	6～8時間	上	本島の北にある楸子島
18-2	18.7km	-	-	2022年6月4日開設
19	18.8km	6～8時間	中	
20	16.5km	5～6時間	中	
21	10.7km	3～4時間	中	
計	本島周回21区間計350.4km、付属コース6区間計86.6km、合計437km			

注：韓国観光公社の『韓国の代表的ウォーキング旅行「済州オルレ」』を基に作成

り、ソウル特別市牛耳洞地区—牛耳峠—牛耳嶺から西北へ流れ出る溪谷のラインを境に南北に分かれていて、北側が道峰山地域、南側が北漢山地域と称されている。

(2) 国立公園管理では、自然荒廃を回復させるために国立公園所管庁の環境部は、自然休息年制を導入して登山道の利用規制を行い、また、特別保護区を設定して溪谷の汚染防止と生態系保護を図ることに力を注いでいる。さらに、利用中心地の一つである北漢山城地区では、登山道沿いにあった多くの飲食店、露店の撤去・移住による思い切った環境整備事業を実施し、自然回復を図っている。また、国立公園管理事務所は、登山者の踏み付けで広がった登山道や、行楽客が入り込んで裸地化した場所などで、柵を設けて植樹を行い、自然再生の環境整備を進めている。

(3) 北漢山国立公園は、春から秋にかけての行楽シーズンは、登山の集中が発生しており、利用者の分散を図る必要と、国民の健康志向が高まり、トレッキングが盛んになったことへの対応、これまで子ども、高齢者、家族づれの利用が少なかった利用者層拡大などへ向けて、2011年に公園の低山地域を周回する探勝歩道として「北漢山トゥルレキル」が開設された。韓国語で「トゥルレ」は「周辺、周り、縁」を意味し、「キル」は「道」のことで、「トゥルレキル」は国立公園の周囲を巡る探勝歩道のことである。

(4) 「北漢山トゥルレキル」は、地域の歴史と文化、地域の人々が関わって息づいている自然の中で安らげる道づくりを目指し、既存の森林内の道、里の道、集落の道をつないで構成している。

「北漢山トゥルレキル」の幅員は、里の道や集落

の道では広い所があるが、森林内の道は1～2mで、基本的には未舗装である。各区間の起点は、集落や一般道からアクセスできるようになっている。

- (5)「北漢山トウルレキル」は、路線距離が71.5kmで、21の区間に分けられている。1区間の距離は2～5km程度、所要時間は1時間から2時間30分の設定になっている。各区間は距離、歩道の起伏状況、所要時間などを勘案して、利用難易度を初級、中級、上級の3段階に分類されている。21の区間のうち初級向きが10区間、10区間の合計距離は28.6km、路線全体の40%となっている。中級向き区間は8区間、距離は35.3km、路線全体の約50%。上級向きは3区間、距離が7.6km、路線全体の約10%である。

初級向きと中級向きの距離を合わせると、路線全体の約90%になり、「北漢山トウルレキル」のコースの大半は、利用難易度の低いコース設定になっている。初級向き区間の中には、「9区間・近くで楽しむ道」1.5kmや、「20区間・王室墓域の道」1.6kmのように、距離が短くて所要時間約45分という区間がある。この2つの区間は、歩道の起伏が少なく、所要時間も短いので、子ども、高齢者、家族づれがゆっくりと気軽に利用できる区間と云える。このような区間の設定は、従来利用が少なかった利用者層の拡大と、国立公園利用の促進効果が期待できる整備となっている。

また、中級と上級コースを合せた距離は、路線の約60%になるので、初級レベルではない登山志向のトレkkerにも楽しく歩けるように思われる。

- (6)「北漢山トウルレキル」を気軽に、安心して利用できるように、沿線9カ所にトウルレキル探訪案内センターが整備され、国から公園管理を委任されている国立公園公団の職員が案内業務を行っている。

国立公園東側の水諭(スユ)にある探訪案内センターは、規模が大きく展示室があり、トウルレキル沿線の自然や人文、北漢山国立公園の概要などの展示解説が行われている。窓口ではパンフレットの配布、各区間のオリジナル記念バッジを販売していて、利用者に親しみをもってもらおう努力が行われている。

- (7)韓国は国民の健康志向が高くなり、歩くこと(トレッキング)が盛んになっている。各地で地方自治体や法人により地域の自然や歴史・文化遺産を巡る探勝歩道づくりが行われていて、その中であって智異山国立公園周辺を回遊する約300kmの「智異山森の道」(智異山トウルレキル)や、済州島を周回する「済州オルレ」約350kmなどの長距離探勝歩道が、2000年代に入って2012年にかけて整備された。

「智異山森の道」(智異山トウルレキル)は、山林庁と全羅北道、全羅南道、慶尚南道の3道、5市郡、16町村の地方自治体、地域に設立された社団法人森の道などの地域協力で2011年に開設し、済州島を一周する「済州オルレ」は、地元の社団法人済州オルレとボランティアの協働で2012年に造られた。「智異山森の道」(智異山トウルレキル)も、「済州オルレ」も、地域の人々の協力や協働によって造られた特徴がある。

- (8)「智異山森の道」(智異山トウルレキル)は、智異山山麓の森林、川辺、農地、集落の古い道をつなぎ、5市郡、16町村の80を超える集落を通るコースが設定され、2011年に完成した。全長約300kmが22の区間に分けられていて、各区間の距離は約10～20km、所要時間は5～8時間である。全羅北道南原市の朱川(ジュチョン)を起点に、時計まわりで各区間は番号で示されている。

- (9)「済州オルレ」は、済州島一周約350kmが21の区間に分かれていて、1区間は15～20km、所要時間は距離が短い区間で4～5時間、長い区間は7～8時間の設定である。なお、「済州オルレ」は、本島から離れている小島と一部区間での複線の整備で、現在は総距離が437kmの長距離探勝歩道になっている。「済州オルレ」の起点は、島の東海岸に近い西帰浦市の始興(シフン)で、ここから時計まわりに区間番号が付けられている。各区間に区間の特徴を示す名称(愛称名)は付いていない。

- (10)「智異山森の道」(智異山トウルレキル)、「済州オルレ」は、地元民の利用だけではなく、外部からの来訪者の利用により、地域の活性化や観光振興に貢献している。また、智異山国立公園、漢拏山国立公園に対する利用者集中の緩和、利用者の分散、自然への人為圧の軽減などに貢献していると思われる。

- (11)「智異山森の道」(智異山トウルレキル)や「済州オルレ」が、新しいタイプの探勝歩道として多くの人々が来訪して利用し、地域活性化、観光振興など多様な効果をもたらす状況が、国立公園施設としての探勝歩道のあり方やコース設定の参考となり、国立公園所管庁の環境部による「北漢山トウルレキル」整備に影響を与えている。

補注

- [1] 1986年12月31日に行われた自然公園法改正で、国立公園の管理を効率的に行うために、国から国立公園管理を委任する組織として「国立公園管理公団」の設置が決まり、1987年7月1日に設立された。

「国立公園管理公団」は、22カ所指定されている国立公園のうち、済州島の漢拏山国立公園を除く21国立公園の管理委任を受けていたが、2019年1月17日に公団名が「国立公園管理公団」から「国立公園公団」に変更された。「国立公園公団」は、現在も21国立公園の管理を行っている。なお、漢拏山国立公園の管理は、済州特別自治道が行っている。

- [2] 漢拏山登山道5コースのうち、自然休息年制指定地がなく、山頂、火口湖まで到達できるのは、東側(城坂岳コース)と北側(観音寺コース)からの2コースである。しかし、この2コースも利用者が多く、登山道一帯の生態環境破壊を防ぐために、2021年から国立公園管理事務所により利用制限が実施され、山頂への登山は予約制となり、1日1,500人に制限されるようになった。
- [3] 社団法人済州オルレは、済州島出身のジャーナリストだった徐明淑(そみんすく)という人が2007年に設立した非営利民間団体で、「済州オルレ」の整備、管理運営を行っている。「済州オルレ」の整備、管理運営には、400名を超えるボランティアが協力している。2021年12月21日に国連経済社会理事会の「特殊協議資格」(Special Consultative Status)を取得し、国際非営利団体としての地位が認められた。日本の九州オルレ、宮城オルレなどの誕生に影響を与えている。

引用・参考文献

- 1) 油井正昭・李景宰編著(2003)：日本・韓国国立公園制度の特徴と管理運営の比較、112-114、140-150、光一文化社(ソウル市)
- 2) Korea Protected Areas Forum(2008)：National Protected Areas of Republic of Korea、104、168-170
- 3) 李景宰・金宣希(2008)：韓国の国立公園の管理現況、国立公園668、5-9、(財)国立公園協会
- 4) 世良砂湖監修・任昭妍・李恩鏞訳(2005)：韓国の国立公園、6-13、54-61、118-125、韓国国立公園管理公団
- 5) National Park Authority(1997)：National Park of Korea、98-105、136
- 6) 国立公園管理公団北漢山管理事務所(1992)：北漢山国立公園25,000分の1地図と解説のパンフレット(韓国語・英語)、地図の等高線は10m間隔で表示
- 7) 韓国海外宣伝研究会編(1994)：韓国の国立公園、90-95、韓国国立公園管理公団
- 8) Korea National Park Service(2015)：The National Parks of Korea、11、14、(パンフレット15pp.)
- 9) 韓国国立公園公団(2022)：韓国国立公園公団HP、韓国国立公園の紹介・特別保護区の案内
- 10) 韓国国立公園管理公団北漢山国立公園事務所(2011)：北漢山城地区移住及び整備事業説明資料、12pp.
- 11) 韓国国立公園管理公団(2013)：北漢山の自然再生・環境保全整備資料の一部コピー7pp.
- 12) 韓国国立公園管理公団(2011)：北漢山トウルレキル(パンフレット・韓国語版)、韓国の国立公園(パンフレット・日本語版)
- 13) 北漢山トウルレキル探訪案内センター(2011)：北漢山トウルレキル(日本語)、(北漢山トウルレキル整備の背景などの説明がある)
- 14) 韓国観光公社(-)：様々なテーマで楽しむウォーキングコース・北漢山トウルレ道、(北漢山トウルレキルの区間を組み合わせたロングコースや、他に幾つかの区間の特徴を紹介)
- 15) 智異山トウルレキル案内センター(引月センター)(2016)：智異山トウルレキルトレッキング、(社団法人森の道設立の説明がある)
- 16) (社)森の道(2015)：(社)森の道HP、(智異山トウルレキルの説明)
- 17) 韓国観光公社(-)：韓国の代表的ウォーキング旅行「済州オルレ」
- 18) (社)済州オルレ(2022)：済州オルレHP、(2022年5月19日に付属コース1区間の開通公表と済州オルレの説明)
- 19) 金明澤編(2009)：韓国道路地図(漢文・英文版)、10-11(議政府)・18-19(ソウル)・80-81(晋州)は縮尺150,000分の1、112-113(済州)は縮尺200,000分の1、中央地図文化社(ソウル市)、(地名と位置の確認)